

# 学 位 論 文 要 旨

氏 名 笠原正行



論 文 題 目

「Comparative kitasato-type optical coherence tomography  
study of differences in scleral shape between  
the superonasal and superotemporal quadrants」

(北里式 OCT による上鼻側と上耳側における強膜勾配の比較検討)

指 導 教 授 承 認 印

清水公也



## 要旨

序論： トラベクレクトミーにおける強膜弁作成部位にあたる上鼻側と上耳側の強膜の形状の違いについては、これまで報告がない。筆者らは上鼻側と上耳側強膜の形状の相違について前眼部 OCT を用いて比較検討したので報告する。

### 対象と方法：

対象は白内障、屈折異常以外に眼科的疾患を有さない 22 例 38 眼とした。対象の平均年齢は  $63.8 \pm 15.7$  歳 (28~80 歳) であった。北里式前眼部 OCT を用い、瞳孔中心を通る水平な線から、それぞれ 60 度の上鼻側と上耳側の強膜を同一検者が 3 回ずつ撮像し、平均値を採用した。画像解析ソフト Image J (National Institute of Health; Bethesda, MD, USA) を用いて強膜表面の曲率半径と強膜凸部分の面積を算出し、上鼻側群 (N 群) と上耳側群 (T 群) とで比較検討した。統計学的検討には Mann-Whitney の U 検定を用いて行い、危険率 5%未満を統計学的有意とした。

結果： 強膜曲率半径は、N 群、T 群でそれぞれ、 $39.6 \pm 10.9\text{mm}$ 、 $19.2 \pm 3.8\text{mm}$  であった。T 群に比べ N 群において有意に長い結果となった ( $P < .001$ )。強膜凸部分面積は、N 群、T 群でそれぞれ、 $0.32 \pm 0.1\text{mm}^2$ 、 $0.61 \pm 0.1\text{mm}^2$  であった。T 群に比べ N 群において有意に小さい結果となった ( $P < .001$ )。

結論： 前眼部 OCT を用いて強膜の形状を解析した。強膜の勾配は上耳側に比べ上鼻側の方がなだらかであることが分かった。